

【図】は宗教や死を象徴するモニュメント性や華やかさなどを表現するもので、【地】は建築を素っ気ないものや目立たず意識されないものにする表現である。

4. コンクリートの素材認識

4-1. コンクリートの素材認識

前節までに検討した表現形式と表現内容を重ねて検討することでコンクリートの素材認識を捉える(図8)。まず表面操作に関しては、【近代】・【非近代】と【人工】・【自然】では「操作なし」が多く、【物質】・【非物質】と【図】・【地】では表面に操作をするものが多くみられた。また形態表現に関しては、【近代】・【非近代】では「不整形」が、【人工】・【自然】では「整形」が多くみられた。このことは、素材の表面に関する表現においては、素材の物質感の有無に関する思考や建築の存在感を強調したり消去する思考がなされる傾向にあることが捉えられる。また素材の形態に関する表現においては、近代性や非近代性の思考や物質感の有無に関する思考がなされる傾向にあることが捉えられる。さらに表面操作と形態表現を持たないものに関しては強度や耐火性などのコンクリートの物性やその生成過程に関する表現を持つものと考えられ、これは人工性や自然性の思考がなされる傾向にあることがわかる。

4-2. コンクリートの素材認識と設計思想の変容

以上で検討したコンクリートの表現形式と表現内容を通時的に考察することで、建築家の素材認識と設計思想の変容について検討する(図9)。さらに、表現内容については図7に示した内容の小分類の推移も合わせて示している。まず表現内容の変遷について考察する。【近代】・【非近代】は1950-1960年代にかけて大きな割合を占めており、その後は2000年代に【非近代】の増加がみられたが全体として減少を続けている。内容の内訳では「簡索性」や「伝統的表現」が長期的に継続してみられた。【人工】・【自然】は1960年代や1980年代に増加し、特に2010年代では大きな割合を占めている。内訳をみると「人為性」や「都市性」に関する内容が長期的にみられ、さらに近年では「永遠性」や「基盤の表現」といった1960年にみられた内容が再びみられるようになった。【物質】・【非物質】は1970年代に大きな割合を占め、1990年代に再び増加している。内訳では「触覚性」や「重さ」の表現に加え、建築の形式や形態を抽象的に表現する「中性」が継続してみられる。【図】・【地】はいずれの年代でも一定の割合でみられ、

1980年代に一時増加した。次に表現形式について考察する。表面操作は1990年代まで「操作なし」に偏るが、2000-2010年代では一転して「素地」と「加工」の割合が大きくなっている。また、形態表現では1950年代に「表現なし」が多く、1960年代では「不整形」が多い。1970-1990年代では「整形」の割合が高いが、2000年代-2010年代には再び「不整形」の割合が増す。

以上の分析を時代背景と合わせて横断的に検討することで、現代日本の建築家の素材認識と設計思想の変容について検討する。まず、1950-1960年代ではモダニズムや伝統論争、メタボリズムを背景に【近代】・【非近代】や【人工】・【自然】が主要な表現となっており、また1960年代には可塑性を生かした形態表現も多くなっている。このことは、コンクリートが様々な建築思想を実体化しうる素材として認識され様々な形態を伴って表現されていたと考えられる。1970年代には、都市化や構造主義を背景に個人の場の確立や中性の思考といった新しい設計思想が幾何学的形態を通して表現されていたことが伺える。1980-1990年代には地域主義といったポストモダニズムや好景気とその崩壊を背景に、建物を自然化させたり目立たない無名のものとする思考や触覚性といった実体そのものへの関心が高まった。2000-2010年代では、阪神淡路大震災後の復興や東日本大震災、環境問題に関する議論の高まりを背景に建設行為の表現や即興性といった【非近代】や永久性や人為性といった【人工】、建物を自然物とみなす【自然】が戦後以来再び増加した。表現形式では表面操作の「素地」と形態表現の「不整形」が多くみられ、液体物としてのコンクリートの認識を基に、建築を原始的なものとして捉え直すとする姿勢が伺える。

5. 結

以上、現代日本の建築家の設計論を資料にコンクリートの表現の形式と内容から、建築家の素材認識と設計思想の変容について検討した。その結果、近年では戦後にみられた非近代性や人工性、自然性の思考のもとに泥のような液体物としてコンクリートを扱う傾向にあることを明らかにした。このことは、現代日本の建築家が建築を再び原始的なものとして捉えなおそうとしていることを示していると考えられる。

注 1) エイドリアン・フォーティアー (2016) 『メディアとしてのコンクリート』(坂牛 卓他訳) 鹿島出版社
 2) ここでは、戦後の国内の建築雑誌の中で代表的なものと思われる「新建築」「住宅特集」「GA JAPAN」「建築技術」を中心とし、それらに掲載された具体的な作品を伴う論説のうちコンクリートのみに託した建築的意味やコンクリートを用いることの目的について言及し、かつその表現が作品の中で主要な表現として読み取れる論説を資料とする。

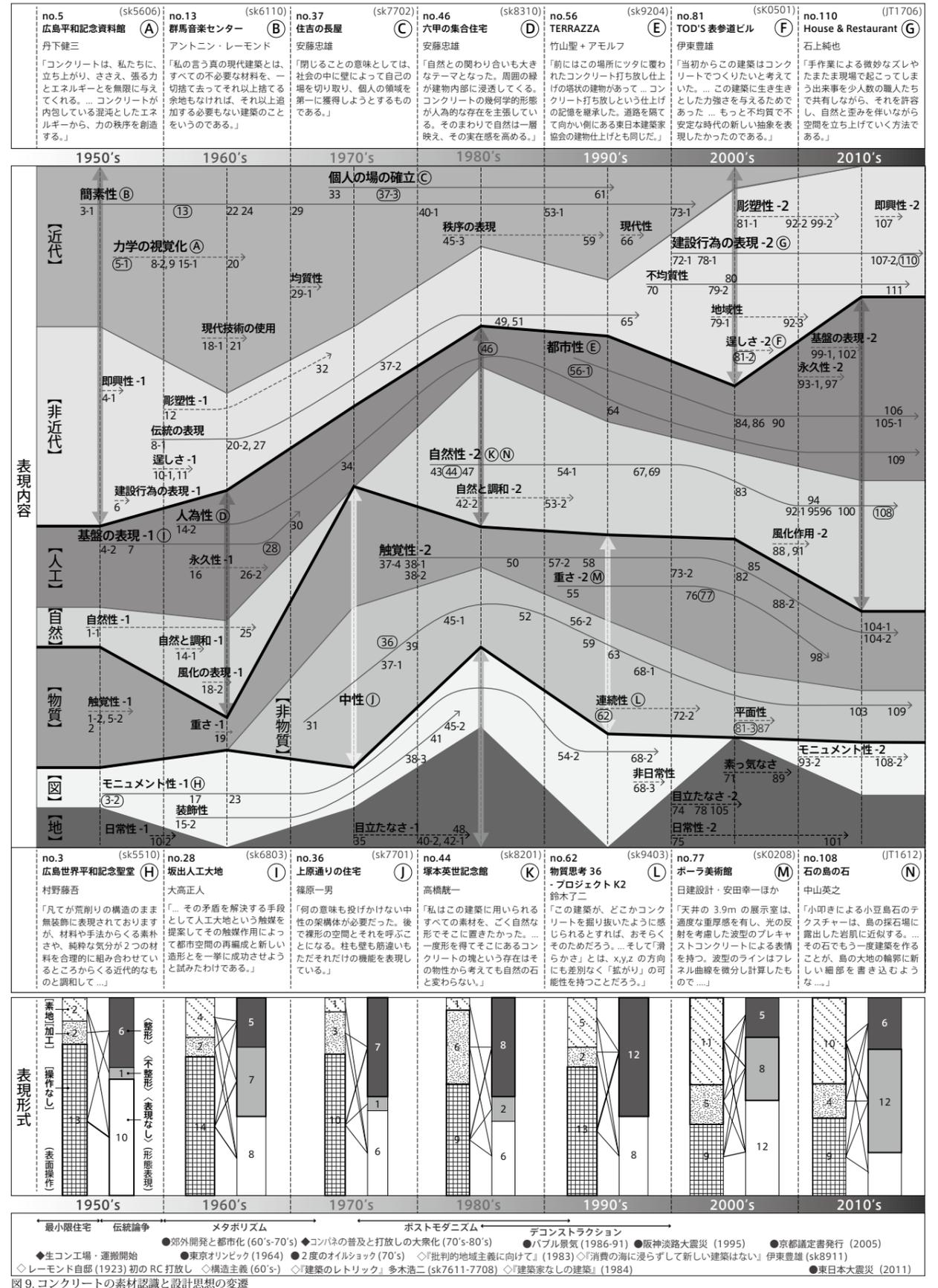


図9. コンクリートの素材認識と設計思想の変遷